

自由応募分科会 1 「海洋境界をめぐる東アジアの国際政治」

報告 2

庄司智孝（防衛研究所）

南シナ海問題に対する ASEAN 諸国の対応——2 国間対応の比較考察

ASEAN's Bilateral Reactions to the South China Sea: A Comparative Analysis

中国の南シナ海への進出と各国に対する強硬姿勢、急速な島礁の埋め立てと軍事化により、同問題は中 ASEAN の領有権紛争から米中の軍事対立へと拡大・複雑化している。こうしたなか、ASEAN の係争国による対応は、ASEAN の枠組みによる解決を前提としながらも、それぞれ異なった様相を見せている。本報告は、係争国のうちベトナム、フィリピン、マレーシアを取り上げ、その比較考察を試みる。

ベトナムは、ASEAN を中心とする多国間対話枠組において積極外交を行うほか、米国をはじめとする域外国との 2 国間協力を進めているが、中国との関係維持も模索するなどその政策は全方位性を維持している。2016 年 1 月の党大会で新たな政治指導部が成立したが、全方位外交に基づくアプローチを継続している。

フィリピンはアキノ政権時、中国の動きに警戒感を強め、ASEAN 関連会合における外交活動を強化するほか、米国との安全保障協力を推進し、法的措置を講じた。ドゥテルテ新政権の明確な方針転換により、中国とは 2 国間協議を模索し、また安全保障面での対米依存を減らそうとする動きが顕在化している。

マレーシアは、以前より中国の立場に理解を示していたが、中国が進出を強化する中、徐々に警戒を強めた。2015 年の ASEAN 議長国時は ASEAN としての懸念を明確に示す政治声明を出すことに積極姿勢を見せたが、最近になりまた「静かな外交」へ戻ったように見える。

このように 3 国のアプローチはそれぞれ異なった様相を示していたが、フィリピンが対決姿勢を転換したことで、各国の政策の類似性は高まっている。その方向性は、経済協力を軸とした対中関係の安定化と平和的方法による問題の解決という従来の手法の継続であるが、その両立は容易ではなく、特に領有権問題で中国から実効的な譲歩を引き出すことはますます困難になっている。